

平成 26 年度ふくしま保育元気アップ緊急支援事業 相談支援者育成研修フォローアップ研修会 要旨

日時：平成 27 年 1 月 22 日（木） 10：30～15：30

場所：ビッグパレット福島

研修次第：

- | | |
|---------------------------------------------------------------------|-------------|
| 1．開会・あいさつ・オリエンテーション | 10：30～10：45 |
| 2．保育施設での取り組み事例の紹介
福島市あすなる保育園の取り組み | 10：45～11：15 |
| 3．スタッフ自己紹介 | 11：15～11：30 |
| 4．事前課題の解説
皆さんからいただいた疑問をご一緒に考えます
(昼食)(講師の方と一緒に会場でいただきます。)(60分) | 11：30～12：00 |
| 4．事前課題の解説(続き) | 13：00～14：30 |
| 5．グループ・ワーク
お互いに情報交換しましょう | 14：30～15：15 |
| 6．クロージング
保育スタッフの皆様へのメッセージ | 15：15～15：25 |
| 7．アンケートへの記入 | 15：25～15：30 |

1．開会挨拶

福島県子育て支援課、小川氏より開会挨拶があった。

福島県では屋外遊びへの制限が続いていることにより、子どもに対して、肥満傾向、体力低下や運動能力発達への懸念、あるいは自然物に触れ合う機会がないことにより、知的・情緒面での発達への懸念といった課題が生じている。また、保育現場では、保護者の放射線への不安な気持ちからの要望への対応や、児童毎の個別対応などといった負担が続いている。一見すると普通に見えても、気持ちの根底には様々な思いがある。越智小枝先生は、「原発事故から 3 年半以上がたった今、福島には現在、不思議な「定常状態」が生じています。」¹と述べているが、まさに同感である。科学的な知識の提供だけではなく、現場に役に立つ方法論も重要だと考える。このような問題に対して、様々な分野の専門的見地に基づき、保育所等が独自の計画により手厚い保育を行うことを支援する、「ふくしま保育元気

¹ <http://jbpress.ismedia.jp/articles/-/42651>

アップ緊急支援事業」が平成 25 年度から行われており、次年度も予算を申請中であり、現場の方々と一緒に取り組みを続けたい。

2. 保育施設での取り組み事例の紹介

福島市あすなる保育園の高荒正子園長より保育施設での取り組み事例の紹介があった。あすなる保育園は福島市内でも比較的線量率が高い地域である。

以下に、震災後保育園において行われた主な放射能対策の取り組みを整理する。

被ばくから守る

(ア) 外部被ばくを低減

- 環境改善のため、線量を測定し、線量が高い場所に関しては除染を繰り返し、高線量のものを撤去した。
- ホットスポットに近寄らないようにしている。

(イ) 内部被ばくの不安解消

- 震災直後はあすなる農園を休園した。しかし、保育において食育が非常に重要なことも含めて、現在はビニールハウスを設け栽培を行っている。
- 食材厳選の観点から、地産地消をやめ、県外産の食材を用いていたが、次第に県内産のものを検査してもものに限り取り入れ始めている。また、1 歳児の飲料水などは現在も購入したものを用いている。

震災後の保育

(ア) 戸外あそびと散歩

- 保護者アンケートを実施して、個別対応を行った。
- 当初は、園庭の端の斜面下の箇所は、除染する、また線量に戻る、再度除染する、の繰り返しであった。園内の土手にある樹木に付着した放射性物質が雨水と共に流れ出ることが原因であった。これに対し、自助努力で土手や駐車場の改修を行った。改修に際しては、子どもが遊べるようになることを意識した。
- 場所や年齢に応じて散歩の制限を行った。福島高専の学生にこの夏、散歩コースの線量を測ってもらい、保護者の理解も得て、現在、5 歳児はある程度の散歩ができているが、小さい子どもはまだ散歩が行えていない。

(イ) 自然物や飼育物

- 震災後 1 年経過した頃から、少しずつ県外産の食品から県内産の食品へ移行。
- 支援物資の活用や疑似体験を行った。
- 自然体験の機会を確保するために工夫した。例えば、昆虫の飼育が行われた。

(ウ) 水あそび

- 震災後 1 年は室内シャワーのみで水あそびをしなかった。2 年目にはサンルームを設置し、プールあそびを行った。3 年目はグリーンチップを敷き詰め、線

量を気にしなくて良い場所を確保し、組み立て式プールを設置し水あそびを行った。

(工) 砂あそび

- 室内の砂場で遊んでいたが、砂場の改修後は、思う存分泥んこあそびができるようになった。

(オ) 運動あそび

- 福島において、震災後、子どもの運動機能低下の懸念が出ているが、これは震災の影響が多少はあるものの、近年の子どもに全体的に言える傾向だと捉えている。
- 意図的・計画的・個別に応じた運動あそびを実施した。
- 運動器具を購入した。
- 外部の支援を受けて運動機能の測定をした。
- 外部講師招聘など(リトミック・3B体操・スイミングスクール・ヒップホップダンス教室)の活動を行った。これらの活動は非常に好評であり、今後も継続的に続けていけたらと考えている。

(カ) 行事

- NPOの方々の支援や、東京家政大学の方々の支援などを通じて、震災以前よりも園外活動が充実した。子どもが外部の人の訪問に慣れるようになった。
- イベントに応じて室内・一部戸外・戸外での実施および未実施など、対応を決めていった。

その他、保護者との取り組み

(ア) 全保護者対象の講演会

- 昨年度の研修参加をきっかけにして、新しい年度が始まるときに、外部の専門家(JAEA、福島高専、NIPH)と地域の人材を活用した講演会を実施した。ただ怖がらずに、本質を見極めることが重要だと感じた、といった感想をはじめ、保護者・職員にとって有意義なものとなった。このような取り組みは重要であると考えている。

(イ) 散歩コースモニタリング

- 講演会を受けて散歩再開への機運が高まったので、福島高専の協力を得て、保育園が震災以前に使用していた散歩コースをモニタリングした。この結果を基に、注意すべきホットスポットを発見することができた。

(ウ) 外部支援

- NPOの方々の支援や、東京家政大学の方々の支援などを通じて、震災以前よりも園外活動が充実した。

こうした保育園での活動を通じて、震災から学んだことは、自分たちが自然の中で生か

されていること、地域のコミュニティーやさらに広い人との絆、そして人の力、便利になりすぎた生活を見直すことの大切さ、である。

今後、子どもの健康のために保育園が行えることは、子どものリスクを最小限に抑えること、保護者が安心できるようにすること（安全であるとは言えない）放射線量に対する知識を持ち、それを保護者に伝え、正しく怖がることができるようになること、保護者と協議し、納得した上でできることをひとつずつ増やしていくこと、である。

また、震災前の生活へ戻っていくためには、出来ないことを嘆くのではなく、出来ることを増やしていくことが求められる。当たり前に行っていたことができる生活を取り戻すことを目指し、今までなかった支援に感謝しつつ、自助努力して改修することが重要である。

保育園の理念の根底にあるのは、「子どもの最善の利益（発達と発育）を保障する」ことであり、心身が健康で生きる力を備え、幸せに過ごせる子どもの育成を目指していきたい。

3．スタッフ自己紹介および除染情報プラザの紹介

本プロジェクトに関わっている講師の簡単な自己紹介が行われた。また、除染情報プラザから、プラザの取り組みおよびプラザで作成された資料の紹介が行われた。除染情報プラザで提供しているなすびの疑問の認知度は低かったが、この研修に参加している保育士の方などは、この研修で情報を得ているので、そこへのアクセスは必ずしも必要ではないと思われるが、この資料は保護者の方々が疑問を解消することを目的に作成しており、保育施設のスタッフがその利用を支援することも有用ではないかとのスタッフからの投げかけがあった。

4．事前課題の解説

国立保健医療科学院の山口一郎氏より、事前に参加者からいただいていた質問に関する情報提供が行われた。山口氏は、どの質問にも正しい解答はなく、それぞれの方の判断がそれぞれの事情があるという前提の上で、保育施設のスタッフの方々の判断を援助すると共に、あることのリスクが小さいと説明している専門家がどのような考え方をしているのかを説明するために、主に、判断に資すると考えられる安全表の考え方と数値的な情報を提供した。この説明は完全に理解して、自身で咀嚼して同僚や保護者に伝える必要はないことが告げられたが、説明中に無理にメモを取る姿が目立った。

その情報に対し、専門家である講師間で活発な議論が行われた。

なお、「事前課題の解説」は、途中で昼食休憩を挟んでいる。昼食休憩では講師や県の職員も含めて参加者間での意見交換が行われた。

Q1. 保育所の畑の土を入れ替えるべき？

論点は大きく 2 つ。サツマイモはこれまで栽培している作物とは異なり、土の中で育つ

野菜であるが大丈夫なのか。一度土の入れ替えをしているが、その後、新たな放射能がどの程度土壌に降ってきているのか。(土壌への降下は、主に空気中の放射性物質によるものを想定したものが示され、落ち葉などの混入への対策が最後に言及された。事前質問で雪が溶けた後の地表の放射性物質の分布の変化を問うたものがあつたので、雪かきでの表層土壌の移動の可能性への言及もあつた)

山口氏からは、放射性物質の降下量の測定結果や、サツマイモへの放射性物質の移行について、具体的な数値を基に説明がなされた。その上で、サツマイモに移行する放射性物質の量は、土を入れ替えることにより減るが、その減少量は測定限界以下の微量なものであり、土を入れ替える対策の優先度は高くない旨が示された。一方で、対策をするか否かに答えはないという点が強調されていた。

専門家間の議論で出てきた論点

- 提示されたグラフ(資料6ページ)は平成25年度のデータだが、平成26年度も同じ傾向を取るのか。同じ傾向だと予測されるなら、前年度より総量が減ることも踏まえて判断に資する情報になるが、そうでないならば判断には使えない。

パターンは基本的には変化しておらず、量は減っている。2013年8月には、一度、周辺モニタリング・ポストに影響を与えるほどの突発的な変化があり、その後、モニタリング体制が強化されている。降下物は舞い上がりの成分が大きいと考えられ、線量率が高い地域で多い傾向にある。

- (資料7ページ)土壌濃度を算出する計算式が難しいのであれば、値を提示するだけでは混乱を生むのではないか。「累計の降下ベクレルの100分の1程度になる」という考え方ではいけないのか。

問題ないと思う。

- これらの細かい数字に対して、保護者が受け取る感覚を同じ方向に向けるためにはどうすればよいのか。

保護者にこのような細かい数字を示すことは必ずしも適切であるとは言えない。数字を示して考えてもらうのは負担を与えかねない。ここでは、県が各種のモニタリングを行いそれを公開していることと、調べたい人はそれを確認できることや空気中の放射性物質のインパクトを研修参加者に伝えようとしている。信頼関係を作るという観点からは、自治体などが頑張ることができることを行うとしていることを再確認することが考えられるのではないか。

Q2. 除染が進まず散歩に行けない。毎時0.1マイクロシーベルトなので外遊びの時間を制限していないが、体に害はないのか?

保護者の視点からは、除染は本来もっと進むべきなのに、という思いがある。また、安全の基準を明確に示してほしいという声も聞かれる。

これに対して、山口氏からは、現存被ばく状況では、「国の方針は、1～20 ミリシーベルトの範囲で下のほうを目指す」というものであり、子どものことも配慮し、関係するステークホルダーの見解に基づいて、それぞれ設定すべきであるとしている旨²³が示された。それ以外の情報としては、他地域や状況別の被ばく線量が提示された。

結論としては、外遊びの時間制限による線量低減効果は小さい。積極的な対策が必要とは言えないため、他の対策との優先度も踏まえ、検討していくことが求められる。

専門家間の議論で出てきた論点

- 保護者が毎年入れ替わることを考えると、保育園としては方針を定めなくて、保護者と一緒に方針を考えるという姿勢のほうが良いのではないかと。昨年の方針は、今の当事者の意志を反映したものと言えないことがあるので、単なる情報として提供したほうがいいのではないかと。
- 同じ自治体にある保育園がどのように散歩をしているのか、という情報は保育士の判断に役立つと考えられる。
- 比較対象として適切なものは何か、ということをもっと考えるべきだ（資料 21、22 ページなど）。そもそも、リスクを比較することはあまり望ましくない。リスク比較をするならば、他の保育園の制限との比較のほうがよいのではないかと（他の保育園の、PM2.5 や紫外線による外あそびの制限と比較するなど）。リスクの性質が異なるものを比較するのは人々に受け入れがたいのではないかと。
- いずれにしてもリスクは何かと
- 資料 23 ページのようなデータは経年変化が見られると良い。砂場 2 は高い値（8.8 Bq/kg）であるが、新潟から送られた砂である。この値をどう捉えるか、を考える必要がある。この値が高いと考えるならば、新潟の砂の放射線量が高いということを言うべきではないか。一方、この値が高くないと判断するならば、ゼロに近づけることを目的とすることがおかしいということを示すべきである。ゼロベースで考えていると、除染はいつまでもやめられない。
- 東電福島原発事故前でもこの程度の放射性セシウム濃度となる表層土壌が存在していた。この試料は Cs-134/Cs-137 比から東電福島原発事故由来と考えられるが、どの成分が寄与しているのか、さらに調べる必要がある。
- 東京都新宿区の土壌データが示され対策を講じている福島県に比べると園庭の土壌濃度が逆転している状況にあるが、さらに対策を講じるのであれば、そのことを考える必要があるのではないかと。一方、これまで受けた線量を考えて、より追加線量を少なくしたいという気持ちを持つこともあるだろう。
- 保育園では、メインで使う砂場では新潟の砂を入れ替えたが、当時の状況では新潟の

² https://www.nsr.go.jp/committee/youshikisya/kikan_kentou/20140703.html

³ http://www.cas.go.jp/jp/genpatsujiko/info/news_111110.html

砂を入れられたことはとても有り難かった。当園ではよりレベルの低い砂が利用可能であったので入れ替えたという背景がある。

Q3. 県内産の食品はモニタリングを実施し安全と言っているが、本当に安全なのか？

山口氏より、検査体制およびその結果について説明があった。結論としては、食品の制限による線量低減効果は小さい。積極的な対策が必要とは言えないため、他の対策との優先度も踏まえ検討していくことが求められる。

専門家間の議論で出てきた論点

- 質問の意図を捉える必要がある。検査結果が信頼できないという意味なのか、安全基準そのものが信頼できないという意味なのか。そもそも、安全基準を満たしたことが、安全（ここではリスクがないこと）であるということではない。そのため、「基準を満たしている」という事実のみを伝え、安全かどうかについては触れるべきではないのではないか。
- 「放射線防護上（資料 29 ページ）」という言葉は、レントゲン室のような管理区域内を連想させる。計画被ばく状況と現存被ばく状況での放射線防護基準の違いという厄介な問題とも関連するので、そういった言葉を使うべきかどうかは考慮する必要がある。
- 福島県内では、検査体制が充実している。流通している食品は検査されていること、住民の要望に応じた検査体制があることが確認された。

Q4. 保育所での取り組みのあり方

職員や保護者の中で意見が分かれ、対応が難しいという事柄が挙げられている。グループワークの議論のテーマとして紹介された。

専門家間の議論で出てきた論点

- 強い不安を持っている保護者がどの程度存在するかによって、対応は異なってくるだろう。例えば、震災直後は強い不安を持った保護者がほとんどであったと考えられる。その時期には、全体に対する説明会を行うことが有効だろう。一方、今は強い不安を持っている保護者の割合は小さくなっていると思われる。だとするならば、個別対応が必要な段階なのかもしれない。
- （資料 35 ページ）コミュニケーターの活用とあるが、地域の保護者に対しては、外部から呼んだコミュニケーターよりも、保育士のほうがうまくコミュニケーションが取れるはずである。専門的知見を分かりやすく話せる人と呼び、保育士がコーディネーターとなって、保護者と専門家の仲介をする、という形式が望ましいのではないかと。
- （資料 37 ページ）情報を伝えるのも、伝えないのも選択肢の 1 つであり、正解はない

のではない。例えば、ホットスポットがあったとして、それを伝えるか伝えないかは、保育園によって異なってよい。情報を伝えることによって生じる負担と、情報を伝えないことによって生じる負担の両方を考えて、選択することが重要である。また、一人で考えるのではなく、多くのスタッフと話し合うことが求められる。

- リスクを伝えるにあたり、放射線のリスクのみを伝える、という方法は正しいのか。保育園の中には様々な他のリスクも存在する。例えば、食品選びには放射線だけでなく、アレルギーなども関係してくる。伝え方が大切である。
- 資料 39 ページなどで、全員が参加しないという点が指摘されているが、全員が納得する、ということはほとんどない。数%の人は強固な意見を持ち、それを変化させない。こうした問題で求められるのは、「説明会」ではなく、「報告会」である。会のネーミングは重要である。
- 資料 40 ページのような心的変化に関する結果がどこかで公表されているのなら、その情報は提示したほうがよい⁴⁵⁶⁷⁸。

5 . グループワーク

参加者を 6 グループに分け、各グループに講師が 1 人ずつ加わり、グループワークが行われた。グループワークの進行方法は以下の通り。

1 人 3 枚まで、これから話し合いたいテーマを付箋に記入する。(5 分)

1 人ずつ、これから話し合いたいテーマをみんなに紹介する。

みんなから出された話し合いたいテーマをグループ分けする。

グループ分けされた話し合いたいテーマについて、順番に話し合っていく。

(~ 合わせて 30 分)

各グループで活発に議論が行われた。グループワークで用いられた模造紙のまとめも、今後、作成する予定である。

6 . クロージング

核融合科学研究所の佐瀬氏から閉会挨拶があった。

保育士と専門家が話し合うことにより、保育士の悩みや不安が少しでも軽減されることが重要であり、そのために専門家として努力を惜しまない旨が話された。

以上

⁴ <http://fukushima-mimamori.jp/mental-survey/>

⁵ <http://cpsd.sss.fukushima-u.ac.jp/about/>

⁶ http://www.ped.med.tohoku.ac.jp/311childhealth/pdf/2_4_1.pdf

⁷ http://www.irides-dpsy.med.tohoku.ac.jp/mentalhealth_archive/outline.html

⁸ <http://www.gakkai.ne.jp/jss/research/86/206.pdf>

(参考) 会場配置図

